

の上述の図書が加わると、熊本大学のゲーテに関する文献はさらに完備する。調べたわけではなく、私の推測にしか過ぎないが、日本一の、あるいは世界的にも注目に値するゲーテ・コレクションになるのではないであろうか。このコレクションが今後もさらに補充完備されることを願っている。

B) ドイツ哲学・文学に関するもの このコレクションは、古い時代の作品も二三あるが、大部分は18世紀から現代までの約80人の作家や哲学者の全集や単行本、約30点の時代別やジャンル別に編まれた叢書・選集、約30人の哲学者や作家に関するモノグラフィーなどから成り立っている。

この中に入っているものの中で、私がそのうちゆっくり手に取って見たいと思っているものに、Walter Harich編のE. T. A. ホフマンの全集がある。

ゲーテ時代（18世紀後半から19世紀前半）の研究をしている方は、この中にさらにいくつも利用したいと思う本を見出されることであろう。

「永松文庫」の中の珍しいものとしては、戦後の詩人ギュンター・アイヒ(1907~1972)の手書きの詩『日本の木版画』(Japanischer Holzschnitt)がある。彼は昭和38年に来日、熊本日独協会の招待を受けて、四国と阿蘇を経由して熊本まで足をのびし、自作の詩をいくつか朗読している。この手書きの詩は、その折に、作者から先生に感謝の印として贈られたものである。

永松先生は、また、外国人による日本・東洋研究の

成果、外国人の日本についての手記、内外の日本文化論や比較文化論などに興味をもっておられた。そして、先生が集めておられた本がかなりあるので、これもこの文庫に入れていただいた。最近では世界の各地から熊本大学に留学し、日本や東洋の研究をしている人がかなりいる。そのような方々のお役に立つかもしれないとも考えた。利用して下さいれば幸いである。

永松先生が亡くなられてから間もなく、御令室のヤス子様から先生の蔵書を熊本大学に寄贈したいとお申し出があった。それから半年ほど経ってから、教養部の深堀建二郎氏の協力を得て、休暇中などに暇を見つけ、図書を選択し、リスト作成に取り掛かった。さらに、それをもとにして、仕事の合間に私がアルファベット順に配列したり、分類したりして、どうにか定年前に目録を仕上げる事ができた。先生が亡くなってから、早いもので、もう3年8ヶ月になる。遅くなったが、先生の愛された蔵書の主要なものが死蔵や散逸を免れ、「永松文庫」として多くの人の利用に供されるようになった。亡くなった先生も喜んでおられるのではないかと思う。

これが実現するまで、前附属図書館長の植村啓治郎教授、田尻英雄前課長、石井保廣課長、草野隆夫専門員、梅尾勝征係長、その他多くの方にお世話になった。心から御礼を申し上げたい。

(くりさき さとる 前文学部教授 独文学)

シリーズ熊本大学附属図書館蔵特殊資料紹介10

重要文化財 阿蘇家文書(34巻36冊)

工藤敬一

今回紹介するのは、天文13年(1544)矢部浜の館に居た大宮司阿蘇惟豊が、従三位に叙せられた際の後奈良天皇女房奉書および一連の関係文書である。惟豊は、兄惟長が守護家菊池氏に迎えられたため、永正4年(1507)大宮司となった。その後菊池家々督を捨て、大宮司復帰を図る惟長に一時矢部を逐われたが、日向の甲斐氏の援けを得て復活し、大永、天文年間の30余年にわたり、大宮司の地位を保った。

天文13年9月16日惟豊は、禁裏修理料を献上した功によって、正四位下から従三位に昇叙された。〔A〕は上階のことを告げる後奈良天皇諭旨、〔B〕は辞令に当

る口宣案である。ともに天皇の秘書局である蔵人所(頭人は広橋国光)から出されたもので宿紙(薄墨紙)が用いられている。後奈良天皇は、勅使として日野中納言(烏丸光康)に〔C〕(表紙)の女房奉書などを持って使者として惟豊のもとに下向し、上階のことを伝達するとともに、自筆の般若心経を阿蘇社の社頭に納めるよう命じた。この時代、天皇の意志はしばしば勾当内侍の女房奉書の形で伝えられた。女房奉書は多くこのような散し書きで書かれた。そして〔B〕に見える上卿(担当公卿)の広橋兼秀が、これに添えて惟豊に遣した書状が〔D〕である。これらの文書は一括

して勅使によって惟豊にとどけられたものとみられる。勅使光康は10月に浜の館に着き、11月13日には、大内義隆が勅使下向を祝する書状を惟豊に送っている〔E〕。このように従三位昇叙に関わる一連の文書が、まとまって伝来しているのはまことに希有のことである。

なお惟豊は、翌天文14年5月28日阿蘇上宮の成満院・萬福院以下の一山衆徒にあてて、勅筆の心経を社納するので大切に保管するように、と指示する書状を送っている。紺紙金泥の般若心経とこの書状は現在阿蘇町の西巖殿寺に所蔵され、国指定の重要文化財とされている。

ところで惟豊は、その後天文18年には従二位に昇っている。本来従二位は右大臣・内大臣相当位であり、従三位は中納言相当位であって、いずれも公卿（今日の閣僚）の位である。このような高位が戦国時代には阿蘇氏のような地方豪族にまで与えられたのである。それは下剋上の世となり、荘園からの収入が途絶え、朝廷も貴族もひどい経済的困窮におちいっており、高位の官職や位階で権威づけをねらう地方の有力武士からの献金や斡旋料によって、辛うじて生活を維持するような状況であっ

たからである。惟豊の場合も、多額の禁裏修理工料の献納の賞であった。おそらく広橋兼秀や烏丸光康も、相当の斡旋料を得たものと思われる。

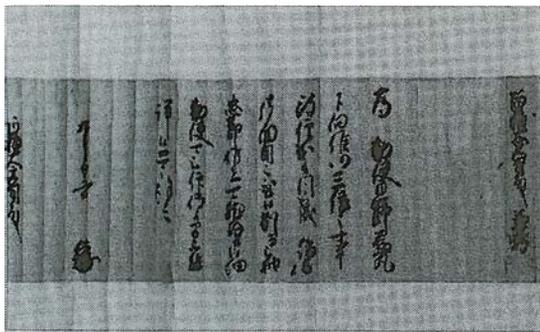
（くどう けいいち 文学部教授 国史学）



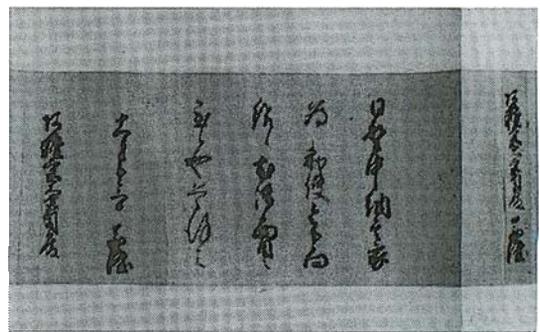
〔A〕 後奈良天皇綸旨（宿紙）
上階事所有 天憐也、禁中御修理方別而抽忠節者、重猶可被行恩省之由、
（賞）
綸命所候也、仍執達如件、
（天文十三年）（廣橋國光）
九月十六日 左中辨（花押）
阿蘇宮大宮司館
（惟豊）



〔B〕 後奈良天皇口宣案（宿紙）
〔端裏書〕
〔口宣案〕
（兼秀）
上郷 廣橋大納言
天文十三年九月十六日 宣旨
（阿蘇）
正四位下宇治惟豊宿祢
宣叙従三位
藏人頭左弁辨兼近江権介
藤原國光奉
（廣橋）



〔D〕 廣橋兼秀綸旨副状（切紙）
〔折封ウハ書〕
〔阿蘇大宮司殿 兼秀〕
〔端裏切封〕
（光康）
為 勅使日野烏丸下向候、仍三位之事被仰出候、同被成綸旨候、御面目之至候、別而被抽忠節候者、可然存候、巨細勅使可被仰傳候間、不能詳候、恐々謹言、
（天文十三年）
九月廿三日（花押）
阿蘇大宮司殿
（惟豊）



〔E〕 大内義隆書状（切紙）
〔折封ウハ書〕
〔阿蘇大宮司殿 義隆〕
〔端裏切封〕
（光康）
日野中納言家為 勅使令下向給候、尤御面目之至候也、恐々謹言、
（天文十三年）
十一月十三日 義隆
阿蘇宮大宮司殿
（惟豊）

東光原

熊本大学附属図書館報

Kumamoto University Library Bulletin, No.11, June 1995

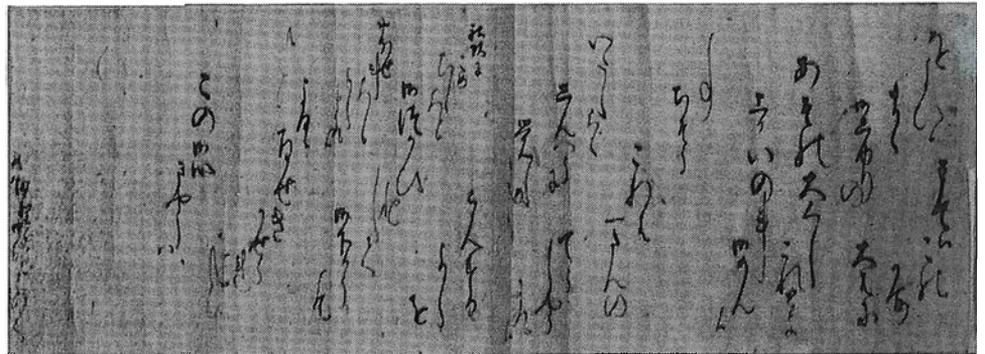
● 如飢似渴 一私の図書館雑感一

● 附属図書館の直面する諸課題について

● 「永松文庫」について

シリーズ熊本大学附属図書館蔵特殊資料紹介10

● 重要文化財 阿蘇家文書(34巻36冊)



[C] 後奈良天皇女房奉書

(彌森書)

(仰) 天文十三九廿三

(6) をよひ候 (5) さてハこの 御所

御しゆりの 大はに

(1) あその大くし 御めん

(2) 上かいの事 候

(7) 事

(8) いたし候 (3) これは 一たんの

ちそう (4) てう

ハ、 (9) 候はんする

社頭に 覚しめし 候はんする

(13) こめ (10) 御つかひ

まいらせ候へと 候

(14) おほせ事候へく候 御下かう候

よし申せとて 候

(11) よく

おほせ

かしく 候へく候

(12) この御心 候へく候

きやうハ

(切封) 日野中納言とのへ